

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオンタウン始良、グループ事業所内保育施設を開園」
  - 2) 「カルビーのコロッケ店“カルビーポテト”が阪急うめだ本店にオープン」
  - 3) 「学研、認知症予防や配食サービス拡充 介護施設を拠点に」
  - 4) 「北京、QRコードをかざすだけで資源リサイクルに」
- 

## 1) 「イオンタウン始良、グループ事業所内保育施設を開園」

イオンタウンは4月1日、鹿児島県始良市のイオンタウン始良東街区（4月22日オープン）に、ショッピングセンターのオープンに先駆けて、イオングループの推進する事業所内保育施設「イオンゆめみらい保育園あいら」を開園する。

「イオンゆめみらい保育園あいら」は、内閣府が待機児童問題の解消と仕事と子育ての両立支援を目的に進める「企業主導型保育事業」と認められた施設で、イオンタウンとして初めての設置となる。

月極保育の他に、地域から要望が多かった一時保育についても、専属の保育士を配置して行う。保育施設内に誰でも利用できる、始良市子育て支援事業の一環となる子育て相談窓口「始良市子育てコンシェルジュ」を設置し、地域の育児に役立てる。一時保育、子育てコンシェルジュは4月下旬より開始する予定だ。

施設面積約479m<sup>2</sup>の園内には、ゆとりのある保育スペースと、厨房の見えるランチルームを設けた。ランチルームは食事以外に発表会やお遊戯会、室内運動スペースとして園での活動に利用する。土・日・祝日・年末年始を含む365日、朝7時～夜10時まで運営するとともに、保育時間数に基づいた保育料を設定し、金銭的・時間的負担の軽減をはかる。地域の待機児童の解消に貢献できるよう、イオングループ企業の従業員だけでなく、ショッピングセンター内の専門店で勤務する人、地域住民も利用できる施設となる。

イオンは、2020年までに事業を展開する都道府県に1施設以上の設置を目標に据え、今後も事業所内保育施設の設置拡大に取り組むことで、グループ企業の従業員のほか、より多くの人々の仕事と育児の両立支援、待機児童解消の一助となれるように努める。

待機児童問題視されている現代社会でこの対策案は今後の女性の仕事と育児に大きな効果をもたらしてくと考えられる。さっぽろ東急百貨店でも4月から企業主導型保育所が設けられ、GMS・百貨店と広がり今後はスーパーやコンビニ内に保育所ができることも有り得るのではと感じた。

---

## 2) 「カルビーのコロッケ店“カルビーポテト”が阪急うめだ本店にオープン」

カルビーは、グループ会社のカルビーポテトから、北海道産のじゃがいものみを使用したコロッケ店「カルビーポテト」を4月19日に阪急うめだ本店地下1階惣菜売場にオープンする。オープンに先立ち、4月12日-18日に、阪急うめだ本店9階催場にて開催される「北海道物産大会」にて一部商品が先行販売される。

カルビーポテトは、じゃがいもを全国各地の生産者と契約して栽培、調達。ポテトチップスなどカルビー製品の原材料として使用し、マッシュポテトを簡単に作れるポテトフレークの製造、販売、じゃがいもの販売もしている。品種ごとの栽培から収穫、貯蔵、物流まで一貫して行い、徹底した品質管理を行うシステムは、世界でも類を見ないという。

販売される2種類のうち「スナックコロッケ」は、ひと口サイズになっており、お酒のつまみにもなる。「とよしろ」という品種のじゃがいもを使用し、ダイスカットにしたものとマッシュ状のペーストを混ぜ、ホクホクした食感に仕上げている。フレーバーは、コンソメパンチ味、のりしお味、ピザポテト味、関西だししょうゆ味、たこ焼き風味の5種類が発売される。価格は8個入り390円（税込）。

「カルビーポテトコロッケ」は、北海道産の「北海こがね」を使用した小判型のコロッケ。熟成させたじゃがいもの甘みを味わえるプレーンと、コクのある北海道発酵バターを使用した「北海道発酵バター」の2種類が用意されている。プレーンは、1個120円（税込）、北海道発酵バターは、1個150円（税込）。

カルビーは、2014年4月から、阪急うめだ本店のデパ地下で、「GLAND Calbee（グランカルビー）」という、新食感のポテトチップスを販売している。GLAND Calbeeは、カルビー史上最も厚みがあるという従来のポテトチップスの3倍の厚さのポテトチップス。自分へのごほうびスナックとして、また、大人が楽しめるスイーツとしても人気を博している。

阪急うめだ本店のデパ地下では、GLAND Calbeeの他にも、グリコのバトンドールや亀田製菓のハッピーターンズなど、スーパーマーケットで人気のある商品に高級感を持たせ、大人が少し贅沢に楽しむことができ、手土産にも使える製品が販売されている。一方で、コロッケのような惣菜は今回が初出店。「カルビーポテト」は、デパ地下の惣菜売り場を盛り上げる新しい顔としても、期待が高まっている。

スナックメーカーが惣菜に進出してきた。またまた「垣根」というものを意識するニュースだと思う。別のニュースだが、新たにオープンするGINZA SIXには「高級のり弁」の店がオープンするという。のり弁=安いというイメージがあるものをあえて高級にするというのが面白いと思った。この二つの話題に共通する「発想の転換」、既成概念や固定観念にとらわれず頭を柔らかくして物事を考えることの必要性を改めて感じた。

---

### 3) 「学研、認知症予防や配食サービス拡充 介護施設を拠点に」

学研ホールディングスが介護事業で保険外の実費サービスを拡充する。4月から健常者向けに認知症予防を目的とした教室を開くほか、高齢者の住宅に食事を届けるサービスも始める。要支援・要介護になる前から高齢者にサービスを浸透させ、将来的に自社で手掛ける介護施設への入居につなげる狙い。

介護事業会社の学研ココファン（東京・品川）が展開する。認知症予防の教室は全国に80カ所ある同社のサービス付き高齢者向け住宅（サ高住）で週1回開く。計算問題を解いてもらったり、椅子に座りながらできる運動を実施したりする。料金は月額5400円。まず5カ所で始め、2年間かけて全拠点で導入する。

配食サービスは1食594円で、サ高住から周辺に住む高齢者の家に配達する。介護職員が配達を担い、同時に見守りの機能も兼ねる。4月から6拠点で始める。

2事業でそれぞれ年間30億円程度の売り上げを見込む。既存の設備を活用することで、大型投資をすることなく収入源を多様化する。国内では保険外サービスを展開する介護事業者が相次いでいるが、要支援・要介護以外の高齢者に向けたサービス提供はまだ限られている。

要支援・要介護になる前に支援することで認知症予防につなげようとする取り組みは今後増えてくのではないだろうか。

学研が手がける認知症予防の計算問題であればネームバリュー効果で安心感がある。数多くの介護サービスを展開する事業者が増えている中、同じようなことをするのではなく元々企業が持っている強みを活かしたサービスが期待される。

---

#### 4) 「北京、QRコードをかざすだけで資源リサイクルに」

北京の住宅団地では、スマホのアプリをベースにした資源ごみ分別回収システムが急速に普及しつつある。「ゴミスマート分類モデル」という名前のアプリは北京環衛集団が開発。ダウンロード後、アカウントを申請して登録手続きを済ませれば、資源ごみの分別回収使用セットを受け取ることができる。セットには使用方法が書かれたパンフレットや「北京藍」エコカードとQRコードが印刷されたシールが含まれている。

利用方法は、分類した資源ごみの入った袋にQRコードのシールを貼り付けて、団地に設けられた専用回収ケースに入れる。新聞紙1キロにつき100点、古着1キロにつき20点、ペットボトル1個につき5点といったように、資源ごみの中身に応じてQRコードと連動する「北京藍（ブルー）」エコカードにポイントが加算される。例えば3000点貯めると、携帯電話の通話料30元分に交換することができるといったように、アカウントにポイントを貯めていくことで様々なサービスを利用することができる。

関係者によると、同システムは北京ではすでに西城、朝陽、豊台など8地区約400の団地に進出しており、登録ユーザーは54000世帯を超えている。来年までに350団地で試行を続けていき、カバー人口100万人を目指すということだ。

各企業によるリサイクルのポイント制度等はあるとしても、ここまで大規模に提供しているサービスは日本にないと思う。携帯電話の支払いなどに使えるのは嬉しいことだ。ゴミ袋ひとつひとつのQRコードを読み取りポイントを付与するという手間さえ解消できれば、日本でも取り入れていけるサービスではないかと思う。